

# BCS

PRIZE-WINNING WORKS



BCS賞受賞作品探訪記

23

第三〇回受賞作品（一九八九年）

## 播磨屋本店円山店

後編

播磨屋本店円山店は、昔の民家の原風景を再現するように、茅葺き屋根の民家として建てられた。前編では、建築主の意図と、設計コンペで選ばれたプランの特徴などを紹介した。後編では、伝統的な建築を実現するためにどのような努力がなされたのかを振り返る。

### 本物志向で 伝統工法を採用する

播磨屋本店・阿野拓夫社主が一九八七年五月に設計コンペを行い、竹中工務店が設計・施工を受注した。南北の軸線上に寄棟造りの茅葺き屋根に覆われた主屋と離れを配置し、繋ぎ棟で連結する構成で、建築面積は約五〇〇平方メートル。概要は、主屋の大きさが間口約一一メートル、奥行き約一八メートル、床全面を三和土風仕上げとし、大きな空間を仕切らずに使う計画とされた。同社の製品であるおき煎餅を販売（当時）するコーナーと、喫茶、餅つきなどの作業場が設けられ、

中央に一〇人ほどが囲める大きさの囲炉裏、カマドなども設置された。一方、離れは一〇畳の和室と、厨房・倉庫を計画。和室には床の間と囲炉裏が設けられた。繋ぎ棟は通路部分のほかに手洗いを設けた。また外部には水車小屋や跳ねつるべ井戸が計画された。

阿野社主はこれらの建物も附属する設備も、すべて本物でつくりあげたいという強い意思を持ち、伝統工法によって各種工事が行われた。だが、右から左へすんなりと工事が運んだわけではなかった。伝統的な木造の骨組みと茅葺き



主屋の内部から見る外の景色は軒先で絵のように切り取られ、深い落ち着きを感じさせる。中央には10人ほどで囲める囲炉裏を据えてある。火棚など昔ながらのしつらえとしながら、腰掛け式として使いやすく設計されている。囲炉裏の左右に見えるのはヒノキの大黒柱。上部で地棟を支えている。



勾玉型のカマド。大小3つのカマドを使い勝手がよいように少し内側にカーブさせ、並べて設置した。





離れに設置された10畳の和室。床の間が設けられ、部屋の中央には炉が切られている。

屋根、土壁や三和土の床などの施工方法は、近代化のなかで稀にか採用されなくなつたため、技術資料も経験も少ない。ほとんど未知の領域の建築をどのように実現するかが課題だった。施工経験をもち職方も探し出さねばならなかった。それでも、当時の兵庫県はまだ職方に恵まれていたほうかもしれない。大工、左官、屋根葺き、瓦職、石工、水車造作、建具職などが、兵庫県を中心に奈良、大阪、岐阜からも集まった。現場に常駐し、施工管理を担当した竹中工務店の森田隆氏は、当手を振り返り「職

人の方々によくのことを教えてもらいながら仕事を進めていきました」と語る。設計図はまともだったが、机上の想定が実際の施工と折り合わない箇所もあり、施工管理側と職方が協力して軌道修正をしながら仕上げていったという。

### 材料の調達も大きなポイント

建物全体の骨組みをつくる木工事は朝来市生野の東隣・丹波市の森田工務店が行った。主屋の内部を見上げると、大きな屋根裏の空間に太い梁が緩やかなカーブを描きながら架けられている。その仕

組みは、屋根を支える骨組み（小屋組み）を投掛け梁で受け、さらにそれを長手方向に架け渡された地棟という部材で受けて、その地棟を三〇センチほどの太さの二本の大黒柱が支えるというもの。梁や地棟は松材、柱には檜が使われている。他にも杉材、栗材など木材はすべて地元産材を使用したのが、揃えるのに骨が折れたという。「伝統工法は技術をもっていることも重要ですが、同時に材料を確保することが難しいんです」と森田氏。もともと遠くまで行って調達したのは茅の材料だった。

茅は屋根を葺く植物の総称で、おもにスキ（山茅）やヨシ（海茅）などが用いられてきた。円山店の施工ではスキを使うことになったが、葺き上げるだけのまともな量の茅を地元で用意することができなかった。そこで、施工担当グループは茅を探すために、民家集落が維持されている飛騨高山地方まで足を伸ばした。しかし、現地では葺き替えのために計画的に茅を刈り、保管しているので余分がないとのこと。諦めずに時間をか

けて折衝を重ね、一六、〇〇束をようやく入手することができた。茅葺職は、篠山市の西嶋義夫氏（西嶋工業）に出会うことができた。当時はまだ兵庫県下では葺き替えや、既存の茅葺きの補修などの仕事があり、経験も豊かだった。屋根は雨量や積雪、風の強さなど気候風土の違いによって形状や勾配に特性がある。自然が厳しいほど急勾配になるという。「このあたりの茅葺屋根は勾配を十一寸（11／10）取っていることや、勾配によつて、茅葺きの葺き厚の限界が決

主屋の高さは約10m、敷地面積3600㎡。主屋、離れ、繋ぎ棟を合わせた建築面積は約500㎡。軒先の茅の厚さは70cmほど。屋根勾配によって厚みの限界が決まってくる。



まってくるということを知った森田氏の話から学習しました」と森田氏。その後の教訓となることもあった。播磨屋本店円山店の屋根勾配はデザイン的な要素も勘案され、十一寸より若干緩い矩勾配（10／10）で設計・施工されたが、当初想定していた寿命の二〇〜三〇年よりも傷みが早く進み、二〇〇二年に全面葺き替えを行った。このときはスキよりも耐久性が高いヨシを宮城県から入手した。長い時間に裏打ちされた伝統の重みを感じられ

る話であると同時に、オーナーによって自然の材料と向き合う努力がなされていることがわかる。

### 水車の音が店舗を活気づける

壁は地元朝来市の左官・嵯峨山薫氏が施工した土壁で、小舞下地を用いている。小舞下地は、柱の間に割竹をネット状に隙間を開けて縦横に取りつけたもので、伝統的な下地工法である。金鍍で荒壁を塗りつけて、ざっくりとした表情に仕上げた。ただ、工期が半年

### 施工者より

## 多くの職方に支えられ 三者が一体となつて完成しました



株式会社竹中工務店  
大阪本店設計部部長 統括担当  
森田隆 Takashi Morita

当時の竹中工務店には、設計部に入る社員にも、まず現場を経験させるというシステムがあり、私はそのタイミングで播磨屋本店円山店の施工管理を担当しました。手探りの状態でしたが、毎日阿野社主と顔を合わせ、職人さんたちと一緒に過ごす中で、屋根でも壁でも、伝統工法がどのようなものかを知らされたという感じですが、技術をすることも大切ですが、プロジェクトに関わった人たちの気持ちを通じたからこそ、いいものができたと思っています。当

時、阿野社主に厳しいことを言われて悩んでいるうちに、こちらの心がどちらを向いているかを大切にされているのがわかってきました。職人さんたちも設計部他の若手が、図面と現場が合っていない理由を一所懸命に考えている姿を見ているうちに、何とかしてやろうという気持ちになり、いろいろなことを教えるようになりました。建築主の強い思いがあつて、そこに設計と施工する人たちの意気合が合つてこそ完成できた仕事でした。伝統工法の現場は当時でも少なくなつていきましたし、規模が大きかったたので、職方の方々にとつても貴重な体験となりました。木工事では架構の接合部を昔ながらの継手仕口を手刻みでつくって組んだことが、やる気を大いに高めたよつでした。私には苦しいことが多い現場でしたが、今では心底楽しかった経験として蘇ってきます。



と短く、壁仕上げの時期は冬場にかかり、夜間に凍結する怖れがあった。凍結すると仕上げた壁が浮いて剥落してしまう。そこで建物外周にシートを掛け、室内ではヒーターを使って温度を保った。



川沿いに建つ水車小屋。水車は直径3m。水力で回転し、その動力で小屋の中に仕掛けた搗き棒が上下して、もち米を精米する。現在の水車は二代目。水音と杵搗きの音が心地よく響く。

しむような音と、杵搗きの音が、静けさのなかでリズムカルに響く。竹中工務店設計部の野田隆史氏が情報を収集し、神戸市東灘区の元水車大工、岡崎行夫氏が施工に協力した。かつて灘の酒造業では精米に水車が使われており、その造作技術はあったが、稼働している水車はすでになかった。岡山県の農村に実物があるとはわかって調査に出向き、回転速度と杵搗きの回数の関係など、播磨屋本店円山店にふさわしい形式を検討。施工に

漕ぎつけた。

### 部分補修を織り込み 成立している日本の伝統

播磨屋本店円山店では大がかりな屋根の全面改修のほかに、部分補修を重ねてきた。木材と植物と土、紙などの材料を組み合わせてつくられる伝統的な建物を維持・管理するにはメンテナンスが欠かせない。そこに竹中工務店が蓄えた伝統的なノウハウと、現代的な技術が生かされている。阿野社主

は指摘する。「伝統工法の建物は年を経るほど味わいが出ます。修繕も何でも上等の材料を使ってぴかぴかにすればいいわけではないんです。適材適所に材料を大切に使うって、必要な部分を修繕していくことが美しいという発想が日本にはあるでしょう」。空と山の緑に溶け込んで、おおらかな表情を見せる現在の円山店の姿は、多くの人に親しまれつつ、伝統技術と文化の継承の意味を語りかけているようだ。



建設時に植えられたケヤキの大樹は円山店のシンボル。茨城県から陸路はるばる運んで移植し、見事に根付いた。